特集

生活を保育へ Vol.4

―排泄するということ―

おむつからパンツへ

藤本みどり

数年前のことです。私が担任をしている保育園のクラスで、各家庭に、子ども、大人、どちらからの視点でもいいという前提にして、短冊に七夕の願い事を書いてもらいました。園の玄関に飾られた笹にゆれる色とりどりの短冊の中で、「脱・おむつ」と大きく書かれた文字と、その横に、誇らしげにVサインで決めているその子どもの似顔絵が一枚。ちょうど二歳になる夏。ある保護者の願い事です。「無理にというわけではないんですが、今年の夏にとれてくれるといいなあと思って…」と話す保護者の思いを乗せながら、初夏の風にゆれていました。二歳前後の子のいる保護者の関心の強さの現れと見てとることができました。

保護者からの相談でこの時期多いのが、食事、排泄です。生きていく最低の生理的現象であると同時に、大事に思うがゆえの保護者の思いと、子どもの思いとが、交錯する状況に陥りやすいようです。人として存在する上で欠かせない社会化の過程であるためか、他者を意識することを排除できない側面を併せもち、ほかのお子さんはどうですか、と気になる出来事となる場合も多くなります。人それぞれとは言いつつ、時には、できたかできないかがはっきりと目に見える形で示される場所として、初めてのハードル、目標のある共同作業と意識させられる場

合もあるようです。反対に、子どもに任せるという名の無関心と、保育園での集団保育の中に過度の期待を寄せられることもあります。

しかし、おむつからパンツへの移行は、できたか、できないかに目を奪われがちですが、ここで大切にしなければならないのは、子どもが自分で自分を律することができるようになることです。そこには、子どもたちのさまざまな、試行錯誤と挑戦が繰り返し行われています。

いずれにしても、大人は、身体的、精神的発達に見合った働きかけを準備し、子どもの中に自律していく器がそろうのを待つのです。

そういった点からも、現在は、おむつから綿パンツへの移行に際して、特に夏を意識せず、子どもの尿感覚、自律への意識が熟した時点でといった考え方が主流ではありますが、さまざまな関係性のもとで、さまざまなかかわりと配慮が行われているようです。

＊

保育園では、一日何度おむつを替えるでしょうか。一日十時間以上の時間を過ごす子どもが多く、起きている時間の大半は保育園の中という子どもも多くいます。われわれの研究の中では、二歳児としては、六回を基本として[1]、それぞれの子どもの発達状況に合わせて、個別に、それ以上の回数を排泄に意識を向け確認していくといったかかわり合いをもっています。

生まれてから歩行が完成するまでの最初の段階では、保育者は子どもの排泄物を確認すると、築き上げた信頼関係を基にしながら、「ちっちでたねー」と声をかけ、抱っこでおむつを替えに移動します。子どもに、のけぞるなどの行動も見られますが、替えてもらえるというかかわりは、快の体験として、時には、替える大人の目をじーっと見つめ、ほほえみ合い、声をかけ合いながら一対一でのやりとりと、そこで二人の間に起こる一体感を感じながらの

おむつ替えを行う姿に出会います。子どもの喜びが、同時に自分の喜びであるといった、共に感じる体験をうれしさとして表現する[2]保育者。そのような保育者と子どもの間ならではの関係性の下地が、排泄行為一連のやりとりの中にも起こり、信頼関係をいっそう育てていきます。

歩く行為が可能となると、手をつないでおむつ替えコーナーへ一緒に移動します。集団保育の場では、主としておむつを替える場所が決まっているため、その場所へ出向くという作業が加わります。おむつを替えることよりも、一緒に手をつないで歩くことのうれしさや、きれいにさっぱりして受け止めてもらえる心地よさとを回帰させ、イメージしているのでしょうか。状況にもよりますが、たいていの子どもたちは、おむつ替えに非常に協力的です。

しかし、一歳半を過ぎると、それまでの素直におむつを替える時期から、「いや」「行かない」と、おむつ替えの場所へ行くか行かないか、排泄について自分で決めたいという意識が出てきて、子どもに替えるかどうかの意思が大きく表れていきます。

ちょうどそのころは、第一次反抗期と呼ばれる時期と重なり始め、さまざまな場面で、「いや」「だめ」が繰り返されていくのです。あんなに素直だったのに、かかわりにくくなってきたなと意識され始める時期でもあります。成長したと喜びを感じる一方、おむつに大量の排尿があったとしても、「でてない！」の一点張り。うーん、困ったな…。このままじゃ、おむつかぶれをおこしてしまうし、歩きにくそう…。と迷いながら、そんなに頑張るのならばと任せてみると、数分後には自分から「おしっこでた」の意思表示があることも多いのです。

また、もう少し成長して、綿パンツで過ごし始めた時期には、間隔として、今、トイレに入ったほうがいいと判断し言葉をかけても、本人は、頑として、「でないの！」の一点張り。きっと漏らしてしまうことが予想されても、任せてみると、案の定、

遊んでいる途中に、「せんせい、おしっこ」。クラスの子どもたちの遊びを中断して、園庭から片道三分はかかる道のりを、手をつないで走って園舎に戻り、トイレへ…！　一クラス十数名いる中で、一対一でかかわることになります。その時間は、複数担任の中の一人の保育者がじっくりその子どもとだけかかわる計算になります。そんなときには、たいてい間に合うことが多いものです。

お漏らしといわれる状況は、訴えることがないときに多く起こります。ままごとコーナーでジャー。玄関でジャー。外遊びでジャー…。そんなとき、保育者は、じっとしていてね、とのかけ声のもとに、周囲にいる子どもたちの場所の確保と、尿の面積を最小限に留まらせるために、お漏らしした子どもがその場から動かないように見守ります。その際、恥ずかしがったり、自信をなくしたりしないような配慮の言葉を、本人と周囲の子どもたちにも添えていくのです。

その間、もうひとりの保育者が、お漏らし用のぞうきんと、床など尿に触れた設備の衛生状態を確保するための薬品を入れた霧吹きと、汚れた衣類を包むビニール袋の三点セット持参でかけつけます。つまり、数分間、保育者二人がかりで事態の収拾にまでとりつけることになります。子どものほうは、あたかも、私を見てね、いっぱいかかわってねと言っているようです。

＊

トイレ行かないと言いつつも、友達が行く姿を見て、そそくさと準備を始めて、行く姿も見られます。こういった集団への波及効果があるのは、保育園ならではの姿だと考えられます。ひとり、ふたりと、排泄に興味をもち始めるきっかけとなり、実際行くことを選択する機会になったりします。排泄を済ませ、トイレから部屋に戻ると、介助にかかわっていないほかの保育者にも「ちっちでたー！」と大きな声で報告。「でたー」と言うときの、「みてみ

て！」といった子どもたちの誇らしい笑顔。逆にカーテンに隠れてそーっとおむつで排泄する子ども。また、お友達の排泄交換時に、「うんち？　おしっこ？　でたの？」と眺めに来る子ども。人形を相手に、おむつ替えのまねをする子どもも多くいます。ちょうどパンツへの移行が進んだころ、「おしっこ」「うんち」の言葉が流行し、盛り上がります。何かあるごとに、「うんちー」「おしっこー」がクラス内で大流行する時期があります。

一生懸命おしっこに関心のある時期から、少し余裕ができて、遊びに夢中になったり、面倒くさくなったり、特に冬などは寒さのせいでトイレに行くのをおっくうがる子どもも出てきます。このように再び漏らし始めますが、その時期を越えて、ある程度の完成をみます。

また、その完成の中には、単に排泄するだけではない、さまざまな動作が加わっていて、それをもできるようになった時点で、排泄行為の完成というのです。実にさまざまな、子どもたちの試行錯誤と学習が行われています。[3)]

＊

昨今のおむつは、実に性能よく作られています。濡れてもさらっとしていて、夏はジメジメとしていますが、通気性がいいように改良されていますし、冬にはほんわか包まれている感覚があるのかと思います。また、おむつ替えを嫌がる子どもでも、さまざまな色やキャラクターによって、興味がおむつに向くようにも作られています。まだまだぬくぬくしていたい敏感な子どもたちには、しっかりとガードして包まれ、守られる体験から、自律という、まさに、「一皮脱ぐ」体験として、リアルに体感される子どもも存在するのではないかと考えられます。

しかし、その守られ感は、スリムで自由自在に歩き回れる快適な綿パンツに比べて、自由は阻害されるため、まさに自律したい欲求と、守られたい・手をかけてもらいたい欲求、羞恥心との間で揺れ動

き、相対するものとして葛藤します。それは、二歳前後に起こる第一次反抗期と呼ばれる時期と相まって、子どもの心と身体は嵐のような体験をしているのかもしれません。自律していくという営みの中で、大人と自分の密接な一対一でのコミュニケーションや、完全な守りと注目と関心から自由になって、誰の手も借りずに「じぶんで」決め、用を足し、後始末できるようになってくるのです。しだいに、自律と反抗期の渦の中から、「じぶんで」といった自分を大きく意識した自己主張をしなくても、安定した自分が、自然と行えるときがやってきます。

三歳の誕生日の声を聞いた途端、子育てがしやすくなったという保護者の声を聞くことも多いものです。また、おむつがはずれたと同時に一つの巣立ちの時期とし、「もう赤ちゃんじゃない」というちょっぴりの寂しさを覚える保護者もいます。生まれてから三年の間に実にさまざまな身体的、精神的、社会的な成長と、周囲を巻き込みながらの嵐の体験を通して、子どもたちは学んでいるのです。その中で、排泄行為の自律が、同時に育ち始めた「じぶん」に大きな意味をもつことを再確認しました。

冒頭で示した保護者の言葉も、排泄行為の自律であるおむつからパンツへの移行を、単に「脱ぐ」だけではない、「じぶん」に目覚めて脱皮していく作業の一つとしてとらえていくならば、私たちは、脱皮のそのものをまで、エネルギーを蓄えながら、身体と心の機能が熟すのを周囲の大人が守り、準備し、待つことが大切なのだと思いました。

註

1) 大戸美也子・他「二歳児の発達と学び」（日本保育学会第60回大会論文集、二〇〇七）

2) 保育者を対象にしたトイレタイムにおけるアンケートの中の設問5「トイレタイムにおける関わりでうれしく感じた事」の集計結果より

3) 大戸美也子『幼児の教育』第一〇六巻九号